

今週の為替相場見通し(2025年9月29日)

総括表		注	先週の値動き		今週の予想レンジ
			レンジ	終値	
米ドル	(円)		147.47 ~ 149.96	149.52	147.00 ~ 152.00
ユーロ	(ドル)		1.1646 ~ 1.1820	1.1700	1.1600 ~ 1.1800
(1ユーロ=)	(円)		173.82 ~ 175.02	174.96	173.00 ~ 176.00
英ポンド	(ドル)		1.3324 ~ 1.3535	1.3403	1.3000 ~ 1.3600
(1英ポンド=)	(円)	*	199.15 ~ 200.51	200.41	194.00 ~ 204.00
豪ドル	(ドル)		0.6521 ~ 0.6628	0.6547	0.6500 ~ 0.6700
(1豪ドル=)	(円)	*	97.25 ~ 98.23	97.87	97.00 ~ 98.50

(データ)先週の値動きに関して、注の欄で無印の項目はみずほ銀行、*印の項目はブルームバーグ。

1. 米ドル

国際為替部 為替営業第一チーム 大野 梨紗

(1)今週の予想レンジ: 147.00 ~ 152.00 円

(2)ポイント【先週の回顧と今週の見通し】

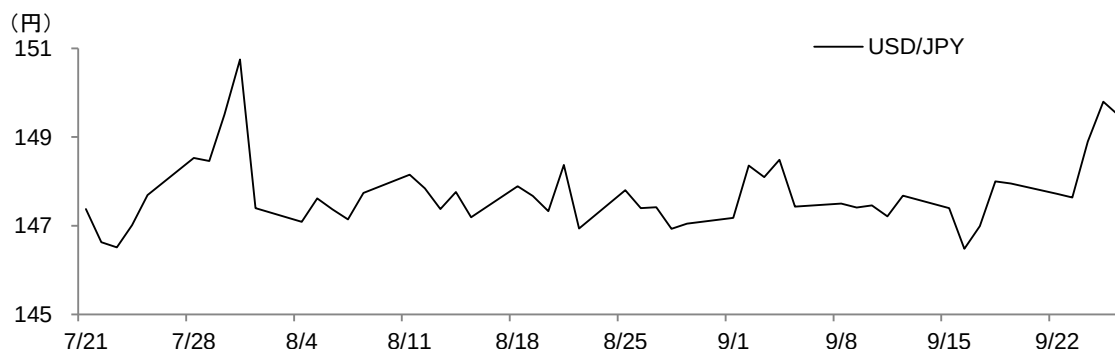
先週のドル/円は週後半にドル高が進行した。週初22日、148.12円でオープンしたドル/円は、148円台前半で揉み合う展開。海外時間に入ると147円台後半に値を下げた。23日、ドル/円は本邦休場で薄商いの中、147円台後半での小動き。海外時間は、パウエルFRB議長によるややハト派な情報発信や米株安などが重しとなり、一時週安値となる147.47円まで下落した。24日、ドル/円はドルの買い戻しが支援材料となり、148円台を回復。海外時間は発表された米経済指標の好調な結果や米金利上昇が好感され、148円台後半に続伸。25日、ドル/円は材料難の中、148円台後半でレンジ推移。海外時間には米金利上昇につれ、149円台後半まで上伸。26日、前日の流れを引き継ぎドル/円は一時週高値149.96円まで上昇。発表された9月東京消費者物価指数の予想を下回る結果を受け、日銀が早期の利上げに動きづらくなるとの思惑も円売りドル買いを支援。海外時間には米国物価関連指標の結果を受け、FRBの利下げ実施継続の思惑からドル売り円買いが優勢となり、ドル/円は149.52円で越週した。

今週のドル/円は底堅い推移を想定。先週発表された24日(水)の米8月新築中宅販売件数は市場予想を上回り、25日(木)米4~6月期GDP(確報)は上方修正され、米新規失業申請件数の結果は市場予想を下回る良好な結果となった。これらの結果を受け、米国経済の底堅さが意識されたことによるドル買いが優勢となり、ドル/円はおおよそ2か月ぶりの水準となる150円手前まで上値を伸ばした。一方、26日(金)に発表された米8月個人消費支出(PCE)デフレーターにおいては市場予想通りの結果となった。インフレ圧力が想定範囲内であったことは投資家の安心材料に繋がり、結果的に次回10月会合での利下げ織込みに変化を来すことはなかった。このような状況下、今週は日米ともに重要イベントが相次ぐ。まず本邦では30日(火)日銀金融政策決定会合「主な意見」(9月会合分)、10月1日(水)日銀短観(7~9月期)、3日(金)には植田日銀総裁の発言機会、4日(土)自民党総裁選が控える。また、米国では30日(火)米8月JOLT求人件数、10月1日(水)米9月ADP雇用統計、3日(金)米9月雇用統計の発表が予定されている。日銀短観において米関税の影響が大きくないと確認された場合は円高要因となり得るものの、植田日銀総裁の利上げへの慎重姿勢や自民党総裁選への不透明感を踏まえると、一方的な円買いは考えづらい。他方、米国においてパウエルFRB議長は「雇用」重視の姿勢を明確にしておき、雇用関連指標の結果は今後の利下げ動向に紐付くことから、結果に一喜一憂する神経質な展開は想定しておきたい。ただし、これらの指標結果が市場予想対比大幅に悪化しない限り、米国経済の底堅さが再認識されることによるドル買いもまた継続するものと見ており、ドル/円は底堅い展開を予想する。

(3)先週末までの相場の推移

先週(9/22~9/26)の値動き:

安値 147.47 円 高値 149.96 円 終値 149.52 円



(資料)ブルームバーグ

2. ユーロ

国際為替部 為替営業第二チーム 松木 悠馬

(1) 今週の予想レンジ: 1.1600 ~ 1.1800 173.00 ~ 176.00 円

(2) ポイント【先週の回顧と今週の見通し】

先週のユーロ/ドルは週半ばにかけて上昇し、その後は反落する展開。週初22日、1.1735でオープンしたユーロ/ドルは複数のFRB高官発言をこなしつつも、全般的なドル売り地合いを好感し、1.18台に乗せた。23日、ユーロ/ドルは前日の流れを継ぎ、週高値となる1.1820を付けたものの、その後は上値重く推移。独・ユーロ圏9月コンポジットPMIは良好な結果だったものの、上値を試す展開とはならず、1.1800を挟んでレンジ推移に留まった。24日、ユーロ/ドルは独9月IFO企業景況感指数の軟調な結果やウクライナ情勢悪化懸念の高まりに加え、米金利上昇などが嫌気され、1.17台前半に下落。25日、発表された米4～6月期GDP(改定値)が市場予想を上回った他、新規失業保険申請件数は市場予想を下回るなどFRBの利下げ織り込み剥落を背景とした米金利上昇。市場全体でドル買い優勢となる中、ユーロ/ドルは一時週安値となる1.1646まで続落した。26日のユーロ/ドルは米8月PCEコアデフレーターが概ね市場予想通りだったものの、米9月ミシガン大学消費者マインドが市場予想を下振れたことで米金利低下と共にドル売り優勢となると、1.17台を回復し、1.1700で越週した。

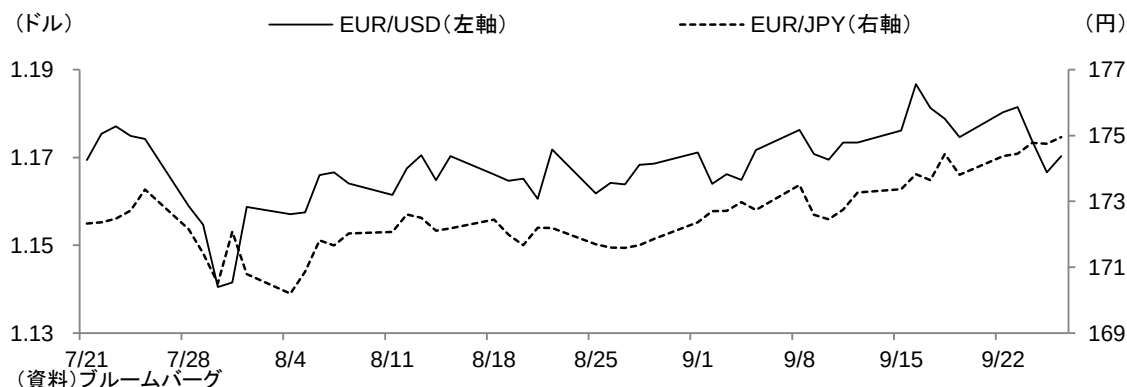
今週のユーロ相場は、米国の材料に振られ方向感ない推移を予想する。茲許のFRB高官発言を見ると先の米経済の見方を巡って見方は割れているが、市場はFRBによる年内2回利下げを80%近く織り込んでおりハト派な見方が大宗を占めている。そのため、今週公表される米雇用関連指標が強含んだ場合には一段と利下げ織り込みを剥がすようなドル高の方が値幅は出やすい。また、直近発生しているロシアの領空侵攻や10月初旬には米政府閉鎖を巡る懸念もある中で、リスク資産の軟調な動きが続く場合にはユーロの上値を抑える要因となるだろう。ユーロ圏固有の材料として29日(月)にユーロ圏9月消費者信頼感、30日(火)に独9月CPI、10月1日(水)にユーロ圏9月CPI、3日(金)にユーロ圏8月PPIの公表が予定されている。ユーロ圏CPIは、この数か月横ばいでの推移が続いており、9月のECB会合にてラガルドECB総裁はデイスインフレのプロセスは終了と発言。発表されるユーロ圏9月CPIが市場予想を上振れた場合には素直にユーロ買い要因だろう。もっとも、仮に市場予想を下振れたとしても、先週公表されたユーロ圏9月PMIで示されたようにユーロ圏の経済は底堅さが続いていると想定され、ユーロ安の動きは限定的だろう。

(3) 先週までの相場の推移

先週(9/22～9/26)の値動き:

(対ドル) 安値 1.1646 高値 1.1820 終値 1.1700

(対円) 安値 173.82 高値 175.02 終値 174.96



3. 英ポンド

欧州資金部 天沼 幹

(1) 今週の予想レンジ: 1.3000 ~ 1.3600 194.00 ~ 204.00 円

(2) ポイント【先週の回顧と今週の見通し】

先週1週間の英ポンド相場は、対ドルで下落した。週初22日は、特段材料がない中で自律反発しドル安。翌23日は、英9月PMI速報値が市場予想を下回り、初動英ポンド売りで反応した後、材料難で方向感なく推移した。24日は、独9月IFO指数が市場予想を下回り、ユーロを筆頭に東欧通貨も続けて売られた。このフローがドル買いにつながり、英ポンドも大きく売られた。25日は、米4～6月期GDPや米新規失業保険申請件数などが強含み、全面的なドル高となった。26日は、前日からの反発となり若干強含むも勢い続かず、そのまま週末に渡った。

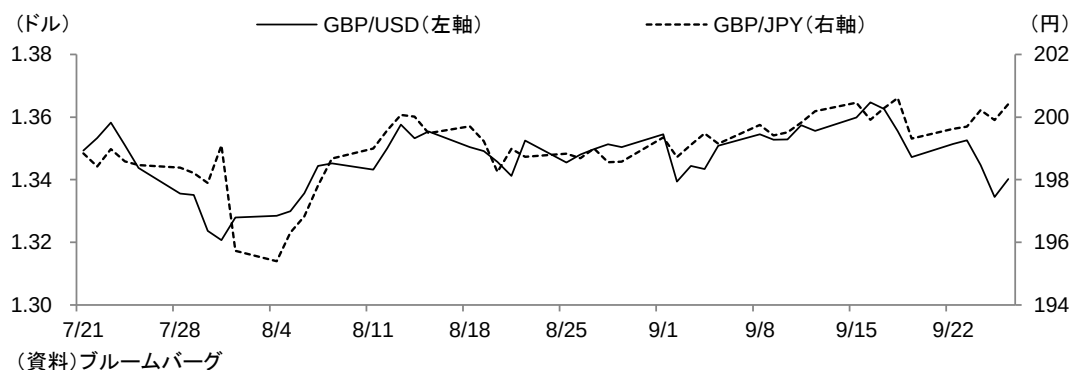
今週の英ポンド相場は、米9月雇用統計を控えて前週からの反発を挟みながらも全体的に上値重い展開を想定。主な経済指標では、30日(火)に英4～6月期GDP、3日(金)に米9月雇用統計が予定されている。オプション市場を見ると、一週間で1.3280レベルから1.3480レベルと比較的小幅レンジでの値動きが想定されている。先週末は、米経済指標を皮切りに急激にドル高基調に転じたが、今週は終盤まで大きなイベントが見当たらない。調整で英ポンドが強含むタイミングはあれど、基本的にはドル高が継続し、週末の米9月雇用統計次第となるように思う。

(3) 先週までの相場の推移

先週(9/22～9/26)の値動き:

(対ドル) 安値 1.3324 高値 1.3535 終値 1.3403

(対円) 安値 199.15 高値 200.51 終値 200.41



4. 豪ドル

国際為替部 為替営業第一チーム 山田 隆広

(1) 今週の予想レンジ: 0.6500 ~ 0.6700 97.00 ~ 98.50 円

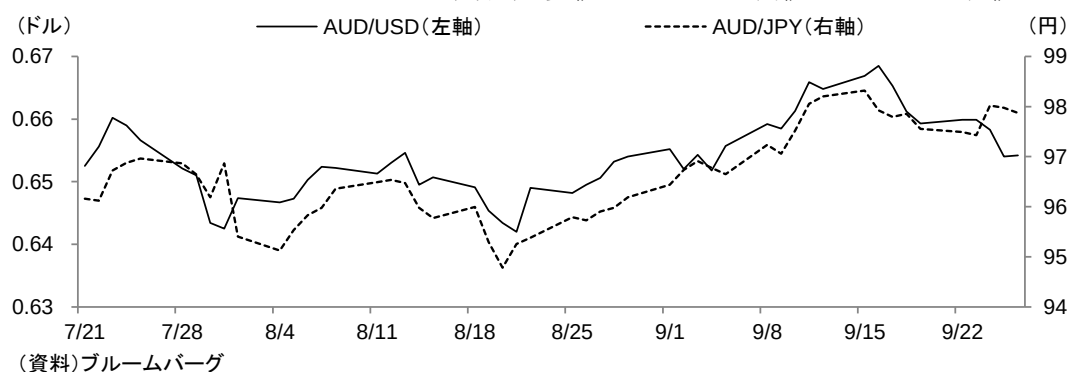
(2) ポイント【先週の回顧と今週の見通し】

先週の豪ドル相場は0.66を挟んでもみあったのち、週後半にかけてじり安で推移。週初22日、豪ドルは東京時間に0.6588でオープンし、23日にかけて新規材料に乏しいなか0.66近辺で動意薄の展開。24日、発表された豪8月CPIが市場予想以上の伸び幅となり、RBAの年内追加利下げ観測が後退したことなどから豪ドルは週高値の0.6628に上昇。その後は、米金利の上昇に加え複数の米住宅関連指標が強含んだことなどから、ドル買い優勢の展開に豪ドルは0.65台まで下落。25日、前日の下落分を巻き戻す形で豪ドルは0.66台を回復。しかし市場予想比良好な米新規失業保険申請者件数や米4～6月期GDP(確報)などを受けて、米金利上昇を伴ってドルが急伸、豪ドルは0.65台半ばまで反落。26日、豪ドルは翌週に中銀会合を控え動意薄のなか、週安値の0.6521まで続落したのち0.6547まで値を戻して越週。

今週の豪ドル相場は底堅い推移を予想。RBAの利下げ余地が限定的とみられる一方で、労働市場の下振れ懸念からFEDの金融緩和継続が意識される想定のもと、豪ドルが買われやすい地合いとみる。なお、週後半にかけては豪州サイドの材料に乏しい反面、米国サイドにて複数の重要経済指標の発表が予定されており、ドル主導で上下に振られる展開を警戒したい。今週は30日(火)に9月RBA理事会が予定、政策金利据え置きが市場のコンセンサスであり、次回追加利下げ時期を巡る示唆があるかが焦点となろう。もっとも、雇用者数が予想外に減少に転じた豪8月雇用統計を受けて労働市場の緩やかな減速が意識されているが、豪8月CPIの強含みから10月下旬に公表予定の豪7～9月期CPIに上振れリスクが懸念される。こうした状況下では、RBAが早期利下げに向けた積極的なコミュニケーションを行う蓋然性は低く、データ次第で会合ごとに金融政策を判断していくスタンスは不変と思われ、豪ドルの下値は限定的と考える。また、ブロックRBA総裁は全会一致で利下げを再開した前回8月RBA理事会後の会見において、公表した最新の経済見通しには数回の追加利下げを織り込んでいるものの多回数の利下げには慎重な姿勢を示しており、RBAの利下げサイクル終了観測も豪ドルの下値を支えよう。片や米国サイドでは30日(火)に米9月コンファレンスボード消費者信頼感指数、10月1日(水)に米9月ISM製造業景況指数、2日(金)に米9月雇用統計および米9月ISM非製造業景況指数の発表を控えるが、特に米9月雇用統計が下振れるなど労働市場の減速が確認された際には、茲許複数の米経済指標の強含みから後退していたFEDの年内2回の利下げ観測が巻き戻される形でドルが急速に売られる展開を想定。

(3) 先週末までの相場の推移

先週(9/22～9/26)の値動き: (対ドル) 安値 0.6521 高値 0.6628 終値 0.6547
(対円) 安値 97.25 高値 98.23 終値 97.87



当資料は情報提供のみを目的として作成したものであり、特定の取引の勧誘を目的としたものではありません。当資料は信頼できると判断した情報に基づいて作成されていますが、その正確性、確実性を保証するものではありません。ここに記載された内容は事前連絡なしに変更されることもあります。投資に関する最終決定は、お客様ご自身の判断でなさるようお願い申し上げます。また、当資料の著作権はみずほ銀行に属し、その目的を問わず無断で引用または複製することを禁じます。なお、当行は本情報を無償でのみ提供しております。当行からの無償の情報提供を望まれない場合、配信停止を希望する旨をお申し出ください。